

報道関係者各位

2026 年 8 月 17 日 〈本日はインドネシア独立記念日です〉

学校法人聖マリアンナ医科大学

インドネシアにおける小児呼吸器疾患の死亡率低下に向けた国際プロジェクトを始動

～ 日本の小児医療の知見を活かし、持続可能な医療体制の構築を支援 ～

インドネシアでは、5 歳未満児の死亡率が日本の約 10 倍¹であり、その約 70%が肺炎や細気管支炎、喘息などの呼吸器疾患によるものとされています。また、多くの島々から構成される地理的特性により、地域による医療格差や高度医療機関へのアクセスの困難さが課題となっています。

聖マリアンナ医科大学（学長：北川博昭、所在地：神奈川県川崎市）は、インドネシア小児科学会との共同で、同国における小児呼吸器疾患の死亡率低下に向けた新たなプロジェクトを始動しました。本プロジェクトでは、現地の医療従事者に対する教育・技術支援をはじめ、広大な地域をつなぐ病院間搬送医療体制の構築を推進してまいります。

1. 背景と取り組み

インドネシアでは、島嶼国という地理的特性から医療資源が分散し、高度医療機関へのアクセスや重症患者の搬送体制の整備が大きな課題となっております。小児呼吸器疾患の死亡率を低下させるために、地域医療機関から高次医療機関まで一貫した呼吸管理体制の整備と、医療従事者の育成が求められています。

本プロジェクトは、日本における小児呼吸器・小児集中治療の知見を活かし、経鼻ハイフロー療法（HFNT）をはじめとする非侵襲的呼吸管理の普及と、インドネシア全土で小児呼吸器疾患に対する初期評価、モニタリング、簡易呼吸サポートを定着させることを目的にしています。プロジェクト初年度となった昨年（2025 年度）は、日本国内の医療機関と連携しインドネシアからの研修（講義・実習）の受け入れ、ならびにインドネシア現地での研修を実施いたしました。



〈インドネシア現地での病院視察・研修の様子〉

¹ 日本ユニセフ協会「世界子供白書 2025」

〈2025 年度の活動実績〉

1. 日本国内の医療機関での研修:

- **受け入れ先:** 聖マリアンナ医科大学病院(川崎)、松戸市立総合医療センター(松戸)、埼玉医科大学(川越)の小児科・小児救急科・PICU
- **参加者:** インドネシアの小児科医、小児集中治療医、看護師 計 9 名
- **内容:** 各回 1 カ月間、呼吸評価・モニタリング技術や、HFNT(ハイフローセラピー)、CPAP 等の簡易呼吸サポート手法の実地研修を実施。

2. インドネシア現地の視察:

- ジャカルタ、メダン、ジョグジャカルタの大学小児病院を拠点に、諸島や山間部の 2 次病院を訪問。呼吸補助に関する医療資源の現状や、新規医療機器(経鼻ハイフロー、JFilo)導入の課題について、現地の医療従事者と意見交換を実施。

3. インドネシア現地での研修:

- 講演会および OFJT(職場外研修)を実施。インドネシア小児科学会の会員医師を対象に、非侵襲的人工呼吸および経鼻ハイフロー療法に関するウェビナーを開催。各回 1,000 名以上が参加。

2. 今後の展開

初年度の展開を踏まえて、今年度からは、医療機器の提供や技術指導にとどまらず、インドネシアの地域特性に応じた包括的な小児呼吸管理体制の構築と、持続可能な自立モデルの確立を目指し活動を継続してまいります。

〈プロジェクトの 3 つの柱と展望〉

1. 包括的な呼吸管理体制の構築と「チャンピオン医療者」の育成

酸素療法から非侵襲的・侵襲的人工呼吸までを一連の治療として捉え、適切に評価・選択・実践できる人材を育成。彼らが指導者(チャンピオン医療者)となり、事業終了後も現地主体で院内研修や指導を継続できる自立した教育体制を構築する。

2. 地域特性・医療レベルに応じた「連携モデル」の確立

都市部、山間部、諸島地域といった地理的条件や、1 次～3 次医療機関における設備レベルの違いを考慮し、それぞれの医療資源に応じた役割分担と連携モデルを整理。集中治療室(ICU)外でも重症化を防ぎ、適切な介入と搬送につながる体制を構築する。

3. 小児科学会との連携による「標準化」と機器の「持続的流通」

インドネシア小児科学会と連携し、治療の標準化に向けたガイドライン作成や院内マニュアルへの反映を推進。また、必要な医療機器の現地調達ルートの確保や認証、健康保険償還リストへの収載手続きを進め、継続的に使用できる環境を整備する。

3. メッセージ

/ プロジェクト代表 川口敦（聖マリアンナ医科大学 小児科学 小児集中治療 教授）

国際共同プロジェクトの中には、知識や技術を一方的に提供する「提供型」あるいは「知識偏重型」のものや、プロジェクト期間中のみ稼働し、終了後は継続が難しくなるものが少なくありません。また、いわゆる先進国が途上国に対してノウハウを一方的に提供する構図も、依然として多く見られます。しかし、本当に重要なのは、双方にとって学びと成長があり、互いに利益を得られる、いわばウィンウィンの関係を築くことだと思っています。さらに、外部からの支援が終了した後も、現地で継続・発展していける自走可能な仕組みをつくることが不可欠だと考えています。



このプロジェクトを進めるにあたり、私どもはインドネシアの友人や現地のステークホルダー、医療従事者の方々と、繰り返し丁寧にコミュニケーションを重ねてきました。顔の見える関係を築くこと、そのために自ら汗をかくこと、そして常に相手の立場に立って考えること。これらは、国際協働を進めるうえで極めて重要です。

この取り組みは、将来的には他の国や地域にも応用可能なモデルになり得ると考えています。私たちの活動にご関心をお持ちの方は、ぜひご連絡いただけますと幸いです。

▼聖マリアンナ医科大学について

聖マリアンナ医科大学は、「キリスト教的人類愛に根ざした「生命の尊厳」を基調とする医師としての使命感を自覚し、人類社会に奉仕し得る人間の育成、ならびに専門的研究の成果を人類の福祉に活かしていく医師の養成」を理念に、1971年に建学いたしました。本学の創立者である故明石嘉間は、無医村地区の医療に貢献し、東南アジアの発展途上国で働く医師の養成を念願しておりました。その想いを引き継ぎ本学では、グローバル医療データネットワークへの参加や国際交流事業を通じて、国際社会へ貢献できる医療人の育成に取り組んでいます。

聖マリアンナ医科大学の国際交流の取り組み：<https://www.marianna-u.ac.jp/interex/>

【お問い合わせ先】

聖マリアンナ医科大学 小児科学 山岸紀子・川口敦

Email: shounika-003“AT”marianna-u.ac.jp

※“AT”を@に変更してメールにてご連絡ください